

## 井伏鱒二「炭鉱地帯病院―その訪問記―」論

―プロレタリア文学への批判意識について―

三 浦 世理奈

はじめに

「炭鉱地帯病院―その訪問記―」（以下「炭鉱地帯病院」と略記する）は、昭和四年八月の『文芸都市』に発表された。ある炭鉱地の病院に訪問した「私」が、少女の悲惨な死について、ドクトル・ケーター、少女の父親、看護婦の三人から話を聞き書きしたという筋の小説である。

この作品について、前田貞昭氏<sup>①</sup>は、三人の述懐が「私」一人に向けられていることに着目し、「真実のみで構成されるモノローグと相違して、対人関係から生じる偏差すなわち虚偽を含むものである」ことを明らかにした。そして作者の超越的視点を排除する「私」という存在を設定することによって、三人の諦観の態度と最後の

タイプルスピーチの間に飛躍を残し、社会問題の具体的な解決策を呈示せずにおくことを可能にしたと述べる。そしてこの作品は井伏が「プロレタリア文学には足を進めず、自己の、資質と現実認識への誠実さの故に踏みとどまった作品」だと論ずるのである。

この前田氏の説をうけて木村幸雄氏<sup>②</sup>は、三人が共同謀議をすすめていたことを指摘し、「「虚偽」と「真実」とをないまぜにして語られた三人の陳述のなかにかくされている「人々のテンダネス」こそが、人間的な「真実」なのだということを語っているのが父親の最後のスピーチなのである」と論じ、前田氏が指摘した三つの述懐とタイプルスピーチの飛躍を埋めた。そして、「ラメンテイション」<sup>③</sup>に心を動かされ、「テンダネス」によって結ばれ、社会的な不正義に対して抗議に立ち上がること

もあるのだというところに、井伏の本音を聞くべきではなからうか」と述べ、この作品は階級的な観点ではなく庶民的な観点から創作をされていること、つまりプロレタリア文学とは異なる独自の創作方法と観点を確立するための試みであったと論じた。

前田氏と木村氏の論考に対して、作品分析の点で異論はない。しかしもう少し踏み込んで作品をみると、プロレタリア文学に対しては、木村氏という創作方法や観点という面で異なっているだけでなく、革命運動のあり方への批判が読み取れるのである。

## 一、「テンダネス」による水面下での三人の団結

「私」は炭鉱地の病院に訪問し、死んだ少女についてドクトル・ケーター、少女の父親、看護婦からそれぞれ話を聞くが、三人の話は訴訟のことになると食い違いをみせる。

ドクトル・ケーターは、少女が死んだ原因は、炭鉱技師長によってごめにされた時にうけた傷であると「私」

に話す。そして訴訟のことが及ぶと、「彼は私に訴訟に用ひる診断書を書いてくれとも言はないし、私もまた訴訟を起こしてみたらどうかなどと教唆もしません」と言っているように、少女の父親に訴訟を起こす意志がないことと、ドクトル自身も父親に訴訟を起こすことを勧めていないと話す。その理由は、事件の起こった場所が炭鉱地であり、「こゝでは総てが殺気立ち、小さな声で物を言つては誠も嘘になり、なぐるぞゝと唝鳴るより先に撲らなければ、撲ることの効果が薄らぐほど」だからである。しかしドクトルと父親が訴訟を断念している中、看護婦は「私にむかつて、この問題は是非とも裁判沙汰にすべきだと主張し」たとも述べる。つまりドクトル・ケーターは、「虚偽や弱さ」による「表面張力」によって少女の父親は訴訟を起こすべきではないと考えているが、看護婦は訴訟を起こすべきだと主張したと「私」に話したのである。

では、少女の父親は何と言っているか。少女の父親は、「ケーターさんは、今度の出来事は十分に社会問題であるから是非とも訴へると申されますが、また訴訟用の診

断書を無料でつくつて下さいました」と言い、ドクトルが訴訟を促したと主張する。この言葉は「虚偽や弱さ」のために訴訟をあきらめると言ったドクトルの話と食い違っている。そして、「私は訴訟などしないことに決めてゐます」とも述べている点はドクトルの話と同じであるが、その理由は「いかなる場合にも私は喧嘩をすることを好」まないからである。

最後に看護婦の話を見てみよう。看護婦は「私はおやぢさんを唆したり訴へるやうに勧めたりはいたしません」と言い、これもドクトルの話とは矛盾する主張をしているが、さらに「おやぢさんは是非とも訴へなければ承知できないと言つて、ケーテーさんに診断書をつくつてもらつてゐました」と述べている。つまり父親が訴訟を積極的に起こそうとしていたと言う主張で、これは父親の話との矛盾が指摘できる。

木村氏<sup>(4)</sup>によつて、「発起人のたらい回し」と指摘されているとおり、ドクトルは看護婦が訴訟を勧めたと言ひ、看護婦は父親が訴訟を勧めたと言ひ、父親はドクトルが訴訟を勧めたと言つてゐる。偏ることなく全員が

訴訟を起こそうとした人に別の人物をあげているのである。このように三人は自分を弁護するとともに、訴訟を起こすことを勧めた対象を全員が巧妙にずらしている。そして結局訴訟のことに關しては矛盾を残したまま、最後のティブルスピーチで、「訴訟の計画」がすすんでいることが知らされる。その場面をみてみよう。ティブルスピーチで「私」が父親の言葉を「雑報的な文章に翻訳」しているのだが、それによると、次のように言つたとい

こ、に同席なさるこのかた(私のこと)に一言申し述べます。このかたは私達が訴訟の計画を正直に告げなかつたといふやうな意味のことをぶつづつ呟いてゐられるやうですが、それは私達を責めるといふものです。その責め道具として何だか三つの外国語を用ひたりなさいましたが、人々のテンダネスを虚偽として指摘する立場へ自分を推薦なさる態度は、いかゞなものかと思ひます。さういふやうなことをする人の忠告は贗造紙幣に似てゐます。(傍線

引用者、以下同)

このように、父親は「訴訟の計画」について否定も弁解もせず、それどころか「正直に告げなかった」ことに不満を言う「私」を非難している。ということは、訴訟は実は計画されていたのであり、三人は「私」に対して嘘をついていたということになる。

三人が「私」に隠して訴訟を計画したのは、木村氏<sup>(5)</sup>が「三人は訴訟を起こすことをめぐって共同謀議をすすめていたことになる。だとするならば、仕掛けのポイントは謀議の首謀者・訴訟の発起人をかくしているところにある」と指摘しているとおり、誰が訴訟を計画したのか分からないようにするためであろう。そうすることでも誰にも国家による被害が及ばないようにしているのである。

この三人の団結は、おやぢさんによって「人々のテンダネス」という言葉で表わされている。この「テンダネス」という言葉は「やさしさ」「柔軟さ」などの意味を含む言葉である。立場の違う三人が、「やさしさ」によつ

てかばいあいながら、「柔軟に」水面下で団結することによって、社会問題を解決しようとしているのである。

## 二、作品の背景

以上検討したごとく、「炭鉱地帯病院」は、三人の「テンダネス」による団結を表わしていた。以下では作品の書かれた背景を検討したい。

井伏鱒二が「炭鉱地帯病院」を発表したのは冒頭でも示した通り、昭和四年である。この時期、社会は如何なる状況であつたらうか。日本は大正四年に第一次世界大戦の交戦国による軍需発注によって大戦景気がはじまり、債権国に転じた。特に重化学工業が発達し、それにともなつて、工場労働者が増加し、労働運動や農民運動がおこるようになった。この作品が発表される前年の昭和三年には第一回普通選挙が行われた。そして三二一五事件がおこり日本共産党員などが大量に検挙されている。また全日本無産者芸術連盟(ナップ)が結成されている。そして同年六月に治安維持法が改悪され、最高刑

が死刑になり、さらに七月、特別特高警察が新設されている。

このように、「炭鉱地帯病院」が発表された頃は、支配者と被支配者との争いが激化していた。まさにプロレタリア文学が一番の盛り上がりを見せていた時期である。それにともない、文学の世界においても、私小説よりも、社会を書いた小説でなければ小説ではないといった風潮も生まれていた。

このような世相の中での生活について、井伏は次のように振り返っている。

左翼文学は圧倒的に文壇を席捲し、左翼作家でなくては問題でないと云はれるやうな風潮であつた。（中略）話が前後混同してしまつたが、富沢が外国に行つている間に文芸都市は一九二九年七月号をもつて廃刊になつた。左翼でなくては同人も謂はゆる同人雑誌疲れがするといふやうな有様で、それに同人の大多数が脱退し紀伊国屋書店長の提議で廃刊になつたのである。そのころ紀伊国屋の小売部で、左

翼文学雑誌の戦旗は一日に百部も売れてゐた。文芸戦線は一週間に八十部くらゐ売れてゐた。文芸都市は一箇月に七十部くらゐしか売れなかつた。店先でこの成り行きを目のあたりに見た私は、左翼文学には充分に市価があるといふことを痛感させられた。戦旗にかぎらず左翼思想のパンフレットや単行本なども呆れるほど売れてゐた。（中略）私は左傾することなしに作家としての道をつけたと思つてゐた。（鶏肋集）昭和十一年五月）

「炭鉱地帯病院」が発表された「文芸都市」という雑誌は、プロレタリア文学の流行によって、廃刊に追い込まれてしまつている。このようなことから、いかにプロレタリア文学が流行していたのかがわかる。このプロレタリア文学の流行は、作家として身を立っていた井伏にとって、大きな関心ごとのひとつだったことが、この文章から読み取れる。それではなぜ井伏は「左傾することなしに作家としての道をつけた」と思ったのか。

そのころ私は同人雑誌「陣痛時代」の同人であつた。早稲田の級友十数名が同人として集まつていたが、八箇月ばかり刊行した後に私をのぞくほか金同人が左傾して雑誌の名前も「戦闘文学」と改題した。同人諸君は私にも左傾するやうに強力うながして、たびたび最後の談判だといつて私の下宿に直接談判に来た。しかし私は言を左右にして左傾することを拒み、「戦闘文学」が発刊される前に脱退した。この雑誌の同人諸君は後になつて一同「戦旗」に合流した。

私が左傾しなかつたのは主として気無精によるものである。私は非常に怠けものであつた。(雞肋集)

ここで井伏は「気無精」のために左傾せず、一人同人から脱退したと述べている。しかし、同人雑誌の仲間が全員左傾するなかで、一人左傾することを拒んでいるところを見ると、「気無精」ということだけが理由ではなさそうである。

「炭鉱地帯病院」と同時期に書かれた井伏のエッセイ

「雑誌の表紙」(文芸レビュー「昭和四年四月」)を見ると、「私」が阿部知二の小説を替めた原稿を書いたら、「親戚のうちの子供(本年二十歳の女子大生)」によって、捨てられてしまったエピソードが記されている。「私」は彼女を叱りつけたが、「プロレタリア文学を最も愛し、その挙句のはては、文芸戦線の愛読者で、吉岡秋水といふ雅号の青年と恋愛におちてゐる」彼女は、「平然として、懐中鏡を眺めて化粧をつくるひながら」、「阿部知二さんといふ人はプロレタリア作家ではないでせう。さういふ人の書いたものは幾らよくつても、ほめたりしては古いわよ」と答える。「私」は気が立っていたので、多くのプロレタリア文学雑誌にみられる赤や青の模様が入つた「重装兵卒」の表紙をちらとみせてから中島直人<sup>(6)</sup>の小説を朗読して彼女に感想を聞いた。すると彼女は表紙に騙されて「すてきだわ」と答え、「私」にいつぱいわされたことに気がつかない。彼女は「プロレタリア文学を最も愛し」ていると言いつつも、それが新しい思想であるというだけの理由で受け入れているからである。この女子大生に代表される表面的なプロレタリア文学の

流行を井伏は疑い、批判的に世の中をみていたことがこのエッセイからわかると言えよう。

また、「鱒二への手紙」(「文芸都市」昭和三年十月)で、井伏は次のように書いている。鱒二のもとに親戚の子供からプロレタリア作家に転換することを求めた「反省をうながす手紙」が届く。その手紙に対して鱒二は「智識のプチブルはよくない。お前は文学の書物なんかぬきにして恋愛をしたらよろしい。その方が間違ひない」という内容の手紙を送る。井伏は書物に書かれていることなく、実際の生活をきちんと過ごすことのほうが大事だと言っているのである。

さらに「散文芸術と誤れる近代性」(「福岡日日新聞」昭和四年四月二日、三日、四日)をみると、自身の時代認識を次のように書いている。

多くのコミュニニスト達は、経済組織の整理によつて、この矛盾といふ事実を駆除でき得るものとして信じてゐるが、仮令いかなる社会機構の時代に於ひても、矛盾と矛盾の変質である近代性とは必ずや存在

するであろう。(中略)若し私のこの考へかたに間違ひがないとすれば、ビルディングやダンスホールや牢獄や争議を題材とし背景として作品を書くことによつて、近代性を帯びたと信じてゐる人々は、近代性に欠けてゐるのみでなく、幼稚なる概念作家にすぎないと断言してさしつかえないであろう。(中略)時代の先端に潜む矛盾に対し、経済学理論に照して批判を加へた点に於て、コミュニニスト達は正しかつた。けれど彼等の仕事の結果は、今日までに幾人の頑強な闘士を出したかといふ計數に終始する。何故かといふに彼等の理論が散文形式によつて示されたところによると、既成美学の黙殺、そして頑強なる闘士となれー彼等はこれ以外のものを示しはしなかつた。勇壯極まる文案のポスターであつたのだ。

この文章で井伏は、「時代の先端に潜む矛盾に対し、経済学理論に照して批判を加へた点に於て、コミュニニスト達は正しかつた」と言っている。コミュニニスト達が社

会問題に対して批判をしている点については評価しているのである。しかし、次の文章で「けれど彼等の仕事の結果は今日までに幾人の頑強なる闘士を出したかといふ計数に終始する」と言っている。つまり、プロレタリア文学は「頑強なる闘士」をどれだけつくるかということにしか焦点がおかれておらず、しかも「勇壮極まる文案のポスター」であると言っている。すなわち、プロレタリア文学は内容がともなっていない、空疎なものであると思つていたことが読み取れるのである。「炭鉱地帯病院」で、少女の父親に「私」は「贗造紙幣」に似ていると言われているが、この「贗造紙幣」と「勇壮極まる文案のポスター」は、見せかけだけは立派で、内容のないものとして共通している。炭鉱地帯の病院に赴き、階級的な問題によつて死んだ少女を取材する「私」は、おそらくプロレタリア文学を執筆するか、少なくとも関心をもつ人物であらう。この「私」が「贗造紙幣」と言われてしまうのは、人々の「テンダネス」を理解しなかつたからである。「頑強なる闘士」をどれだけ出したかということだけで、「テンダネス」には目を向けようとしな

いプロレタリア文学への批判があつたからだといえる。つまり、「炭鉱地帯病院」では、「私」を批判する少女の父親ら三人を通してプロレタリア文学を批判しているのである。

### 三、「蟹工船」との比較

小林多喜二の「蟹工船」は、「炭鉱地帯病院」が発表されるわずか二カ月前、昭和四年五・六月の「戦旗」に発表された小説である。カムチャツカ海で蟹を獲り加工する船を舞台に、悲惨な漁夫たち労働者の実態と、資本家との闘いを描いている。本節ではこの「蟹工船」と「炭鉱地帯病院」との比較を試みる。

「炭鉱地帯病院」では、女中奉公にでた少女が、炭鉱技師長にてごめにされた時受けた傷によつて、「惨憺たる苦しみのうちに死んで」いった。そしてこの少女をめぐつて、三人の「テンダネス」が描かれている。一方「蟹工船」においても、資本家側の一方的な暴力によつて怪我を負つたり、死んでしまつたりする人と、それによつ



て団結する人々が描かれている。そのきっかけとなるのは、七章で寝たきりになっていた脚気の漁夫が死んでしまったことである。漁夫の死は過酷な労働によって「殺された」とお通夜をする漁夫たちに認識され、「仇をとる」という意志が彼らの間で芽生え始める。そして、次第に「反抗的な気持ち皆の心に食い込んで行」き、「自分達の蛆虫そのまゝの生活がアリ／＼と見えてきた」という描写もある。さらに三、四人の代表者も誕生し、「赤化運動」に関心をもつようになり、またお通夜のときに実行した「サボ」の成功も手伝って、ストライキを執行する方向に労働者達がまとまって行く。監督はピストルを持っており、反抗すれば殺されるかもしれないが、「殺されるツて分つたら？馬鹿ア、何時だ、それア。——今殺されているんでねえか。」といっているように、殺されるかもしれないという恐怖よりも「今殺されている」という意識の方が強く働き、監督に反抗しようとする意志がしだいに高まっていく。

そして小説の終盤で、漁夫たち労働者が団結し、大暴風になるにも関わらず働かせようとする監督らに対し

て、漁夫達はストライキを執行することを決意し、監督に対して「要求条項」を突き付けようとする。そして、吃りの漁夫がスピーチをする。

「諸君、とう／＼来た！長い間、長い間俺達は待っていた。俺達は半殺しにされながらも、待っていた。今に見ろ、と。しかし、とう／＼来た。」

諸君、まず第一に、俺達は力を合わせる事だ。俺達は何があろうと、仲間を裏切らない事だ。これだけさえ、しっかりとつかんでいけば、彼奴等如きをモミつぶすのは、虫ケラより容易い事だ。——

(中略)

「俺達の交渉が彼奴等をタ、きのめせるか、その職分を完全につくせるかどうかは、一に諸君の団結の力に依るのだ。」

このように団結を煽り、それぞれの代表者が「要求条項」と「誓約書」を持って、船長室に出掛けた。その一方で、その他の労働者たちは示威運動することに決め

る。労働者達の団結は強くなり、資本家に対抗する。次に監督達との闘いの様子が描かれる。そして、漁夫や火夫、水夫たちは、直接「自分達の『手』で」、「監督をた、きのめ」した。だが、そのすぐ後に「駆逐艦」がきてしまふことによつて「簡単に片付いてしま」う。

「不屈者」「不忠者」「露助の真似する売国奴」その罵倒されて、代表の九人が銃剣を擬されたまゝ、駆逐艦に護送されてしまった。それは皆がワケが分らず、ほんやり見とれている、その短い間だった。全く有無を云わせなかつた。(中略)

「俺達には、俺達しか、味方が無えんだな。始めて分つた。」

「帝国軍艦だなんて、大きな事を云つたつて大金持ちの手先でねえか、国民の味方？ おかしいや、糞喰えだ！」

このように資本家に敗れはしたものの、「もう一回」といって、再び運動に立ち上がる人々の姿が描かれ締め

くりとなる。さらに最後の「附記」において、二度目に行つた「サボ」は成功したこと、作中に登場した船だけでなく、複数の船で「サボ」やストライキが行われていたこと、また監督や雑夫長などが、漁期中の不祥事のために会社から首をきられたこと、そして「組織」「闘争」を知つた漁夫や雑夫が、色々な労働の層へ入り込んでいったことが付け加えて記されている。以上のように、「蟹工船」では、労働者の団結と、資本家との闘争の形が書かれていた。その団結の有り様は、労働者たちが代表たちを中心に組織をつくつてまゝとまり、「要求条項」や「誓約書」をつくつて資本家たちに対抗するという形である。そして真正面から監督に闘いを挑み、「叩きのめす」ことができたが、結局駆逐艦がきたことによつて敗れてしまった。

それに対して「炭鉱地帯病院」では、少女の父親は、自分の娘が炭鉱技師長がてごめにした時に受けた傷が原因となつて死んだのにも関わらず、炭鉱技師長を訴えようとするどころか、「娘の一夜ハズバンド」と言っている。そして、「この現実には私達が不幸にうちのめされるやう

に前もって制度づけられている」と述べた上に、次のように続ける。

社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるものです。若し私が種々なる問題を言詮してそれを社会の問題とするならば、私なる人間は制度に対して喧嘩をしむけるといふものです。しかし私は、いかなる場合にも喧嘩は好みません。私達不幸といふものに慣れてゐます。たゞたゞ私達は、不幸が私達にむかつて色彩強く押し寄せて来た時には、能ふる限り嘆けばよろしい。ラメンテーションのみが私達に与へられた自由です。

父親は「社会の制度は大地と同じく動かすべからざるもの」という認識があり、「いかなる場合にも喧嘩は好みません」と言い、嘆くことしかない。また、ドクトルケーターも、コップの水の表面張力のたとえを用いながら人々の「虚偽や弱さ」について話し、看護婦も生命の五匁説を話しているように、「炭鉱地帯病院」にでて

くる人々は全員、少女の悲惨な死という「ラメンタブル」な出来事に直面しているにも関わらず、一見「社会の制度」を変革しようとしているには見えない。「蟹工船」で、漁夫の山田が脚気で死んだ時、「サボ」を実行し、監督に反抗しはじめた事と比べると大きな違いがある。しかし、ティブルスピーチで実は訴訟の計画がすすんでいることが結末に来てあきらかにされる。その少女の父親のスピーチと、漁夫の代表の吃りのスピーチを比較すると違いがよくわかる。「蟹工船」で、いよいよストライキを決定するという時、漁夫や火夫など、それぞれ役職の代表がスピーチをしている。その内容は「奴等如きをモミつぶす」ための「団結」を呼び掛けるものである。このスピーチによって、労働者たちのストライキに対する勢いは増す。しかし、このように勢いが増したせいで、監督達に駆逐艦を呼び寄せられ、結局労働者たちは資本家側に敗れてしまった。一方、「炭鉱地帯病院」の少女の父親のスピーチでは、「私」ははじめて訴訟の計画を知らされ、それまでの述懐の虚偽を指摘した「私」は「贗造紙幣」と言われてしまう。「贗造紙幣」と

は、前に触れたとおりプロレタリア文学を批判する言葉だと考えられる。つまりあえてテイブル・スピーチという形で、団結を隠していることを知らせたのは、「蟹工船」にも出て来たような、労働者たちを鼓舞し、団結をおおっぴらに呼びかけ扇動するスピーチを批判するためであった。

また「蟹工船」では船医が登場する。七章でケガを負った漁夫を、他の漁夫たちはその船医のもとに連れて行く。そして、「監督は蛇に人間の皮をさせたような奴だから、何とかキツト難くせをぬかすに違いな」と思った漁夫たちは、「その時の抗議のために」、船医に診断書を書いて貰うように頼む。船医は「割合漁夫や船員に同情を持って」おり、「病氣や怪我をした漁夫や船員などを割合に親切に見てくれていた」。またこの船医は「後の証拠」にするために、漁夫や船員の病氣や怪我のことを「日々日記につけ」てもいる。さらに、死んだ漁夫のお通夜にも参加するなどして、同情を寄せていることをうかがわせる描写もある。しかし、船医は診断書を書いてくれない。その理由は「飛んでもないこと」になっ

てしまうのである。診断書を書くことは、監督である浅川にとつて不利になる証拠を残すことになるため、監督を敵にまわすことになり、船医は自分の立場が危なくなってしまうのである。

このように、船医は漁夫や船員たちの立場について同情をもちつつも、状況を変革させることは出来ないことを認識している人物として描かれている。「船医も矢張り其処まで行くと、もう俺達の味方ではなかつた」と書かれているように、「蟹工船」のなかでは、同情はよせていても、味方ではない人物とされている。

「蟹工船」において漁夫たちは繰り返し「俺達には、俺達しか味方が無えんだ。」と言っている。船医にしてもその同情の限界を示しただけで、むしろ船医によって労働者たちが孤立無援であることを再確認させ、「闘士」をうむことに役立てている。

それに対して、「炭鉱地帯病院」のドクトルや看護婦は、「蟹工船」に出てくる船医と同じような考え方をしながら、水面下では「診断書」を書いてあげたりなどしている。

このように比較してみると、「蟹工船」は、労働者を「闘士」にするために団結を煽っている書き方をしているが、井伏は逆に、ドクトルや看護婦の同情に目を向けて、「テングネス」によって結びつく人々の方に期待をかけていたことがわかる。

また、作品全体としていえることは、「蟹工船」は、社会の矛盾を暴き、ストライキに至るまでの人々の団結の有様を書いている。社会の矛盾を暴いたのは、この社会問題を広く人々に認識させるため、作品を公表することで世の中を变革させようとしたのである。それに対して「炭鉱地帯病院」は、一見、世の中に対して諦観している作品のようにみえる。しかし、表向きそうは見えないだけで、実際はプロレタリア的な精神が織り込まれた作品であった。

### 結びにかえて

なぜ井伏はプロレタリア的な精神を肯定しながら、それを作品のなかに隠したのであろうか。それは前述した

とおり、「炭鉱地帯病院」が発表される前年の昭和三年に三・一五事件もあつたように特高警察によって、大量の共産黨員や無政府主義者たちが検挙され、殺される事件が多々起こっていたからであろう。「蟹工船」を書いた小林多喜二は、この後昭和六年に共産党に入党し、革命運動に身を投じたが、昭和八年に特高警察に検挙され虐殺されている。また革命運動も国家の弾圧によって終息していった。

「炭鉱地帯病院」で、作中の人物たちが、「テングネス」によってかばいあいながら団結し、自分の身を守りながら訴訟の計画をすすめているように、井伏も自分の文学を守りながら、批判を作品のなかに織り込んでいるのである。このような井伏の老獪さもまたこの作品から窺われるのである。

注・

(1) 前田貞昭「『炭鉱地帯病院』管見―『私』の機能と作品構造をめぐって」(『国文学攷』昭和六十一

年三月)

(2) 木村幸雄「炭鉱地帯病院」小論」(「大妻女子大  
学紀要」平成十七年三月)

(3) 〈英〉Lamentation 悲しむこと、嘆き、愁嘆。

(4) 同注(2)

(5) 同注(2)

(6) 中島直人(明三十七〜昭十五)はハワイ生まれの

小説家で井伏の友人。故郷であるハワイに寄せる

郷愁を抒情的に描く作品が多いとされている。

※本文、エッセイなどの引用は「井伏鱒二全集」第

一卷・第六卷(筑摩書房、平成八年十一月・平成

九年六月)に拠った。また、「蟹工船」は「小林多

喜二全集」第二卷(新日本出版社、昭和五十七年

六月)に拠った。